

授業力向上に向けての取組

—「授業実践事例集」の作成における研究—

～主体的に学習する児童生徒を育てるための授業づくり～

学校経営支援課 松永 健治 植原 浩之
市瀬 佐代 藤山 三樹

要 旨

経験年数の浅い教員の授業技術を向上させるため、3年計画で、授業実践に役立つ具体的な事例集を作成することにした。1年次である平成26年度は、「とくしま授業技術の基礎・基本」を作成した。2年次の本年度は、児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりに必要な技術として、具体的な授業実践事例集を作成した。

キーワード：授業点検シート、主体的な学び、学習規律、学習形態の工夫、
進捗・学力差への対応、学習の見通し・振り返り

I はじめに

経験年数の浅い教員の基礎的・基本的な授業技術を向上させるため、学校経営支援課義務教育担当では、平成26年度に「とくしま授業技術の基礎・基本」を作成した。本研究は、3年間の継続研究で、1年次「教師が授業中に必要とする授業技術」2年次「児童生徒を主体的に取り組ませるために必要とする授業技術」3年次「教師が授業前、授業後に行う授業技術」の計画のもと、本年度が2年次に当たる。

1年次である昨年度、授業力向上研修（教職2年目）の教員を対象に「授業点検シート」「授業振り返りシート」を用いたアンケート調査を行い、経験年数の浅い教員が求める授業技術は何かを把握し、まずは「教師が授業中に必要とする授業技術」に絞った基礎・基本の手引を作成した。その経緯等は、本センター研究紀要第94集にまとめた。2年次は、その続編として、児童生徒を主体的に取り組ませるために必要な授業技術を研究し、授業実践事例集の作成を進めてきた。

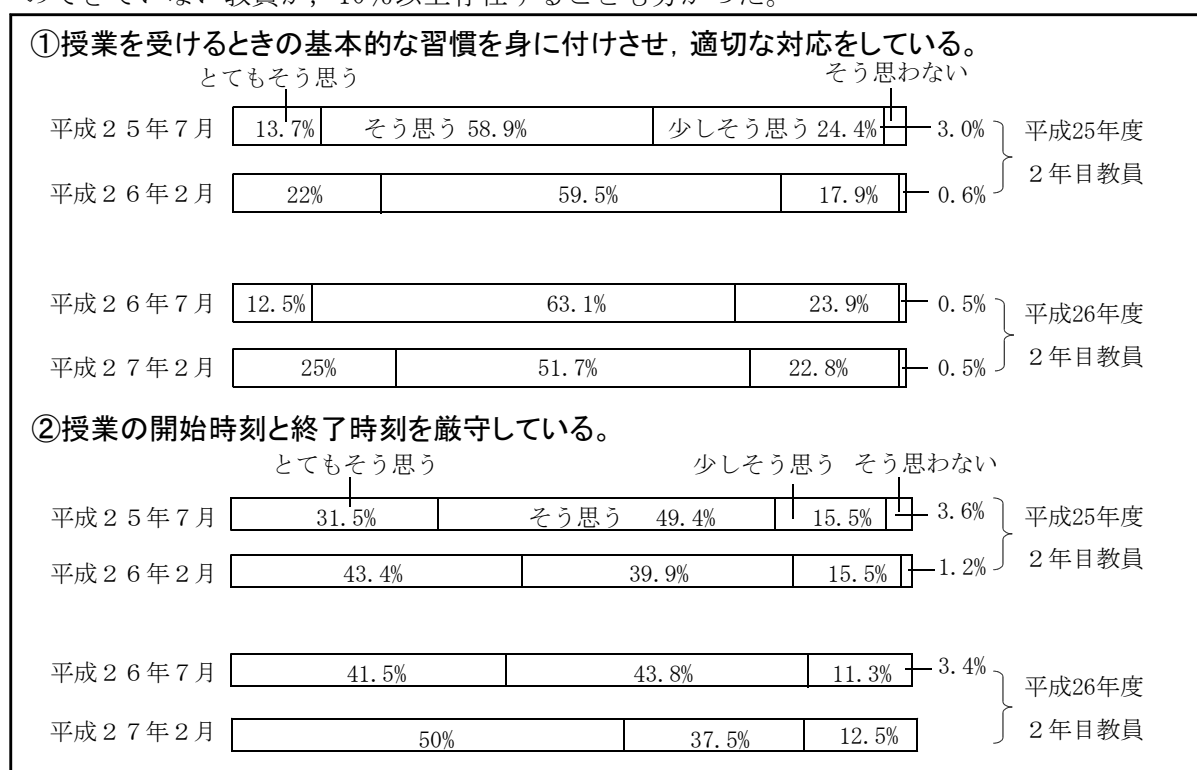
II 研究の実際

- (1) 昨年度に作成した「授業実践事例集（とくしま授業技術の基礎・基本）」を本センターのWebページに掲載し、各小・中学校、高等学校、特別支援学校が校内研修等に使用できるようにした。また、本センターで行う基本研修（初任者研修、授業力向上研修、教職5年次研修、10年経験者研修）において、当事例集を用いた指導を行い、内容の共通理解と周知を図った。さらに、授業力向上研修（教職2年目）の受講者に、当事例集についてのアンケート調査を行い、よりニーズに合った事例集に改善するための情報を得た。
- (2) 昨年度の続編として、「主体的に学習する児童生徒を育てるための授業づくり」を作成し、「学習規律」「学習形態の工夫」「進捗・学力差への対応」「学習の見通し・振り返り」の4項目についてまとめた。

Ⅲ 学習規律について

1 授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

平成25年度・平成26年度のそれぞれの年度の教職2年目の教員を対象に、授業点検シートを用いた振り返りを実施し、分析を行った（図1参照）。学習規律に関わる項目「①授業を受けるときの基本的な習慣を身に付けさせ、適切な対応をしている。」について、平成25年・26年度の両年度で7月より翌年2月の回答の方が、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加した。つまり、経験を積むにつれ、学習規律の確立を図るための取組ができるようになってきていることが分かる。しかし、翌年2月の回答において、「少しそう思う」「そう思わない」と捉えている教員が、20%前後存在することも事実であり、取組への難しさを感じている教員の割合が多いことも分かる。また、「②授業の開始時刻と終了時刻を厳守している。」については、平成25年・26年度の両年度で、翌年2月においても「少しそう思う」「そう思わない」と捉え、時刻厳守のできていない教員が、10%以上存在することも分かった。



〈図1 「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目①②の集計結果〉

また、授業力向上研修の実施報告書において、次のような記述が見られた。

- 子供を理解し、学級の学習ルールを教師が明確に示す必要があり、児童が落ち着いて学習に取り組めるようにしたい。（小学校）
- 聞くときは聞く、話すときは話す、活動するときは活動するというように、授業のルールづくりを徹底することで、メリハリのある授業を行いたい。（中学校）
- 生徒の活動の際、メリハリがつかなくなってしまう、授業のルールが徹底できないことがあるので、学習ルールを徹底したい。（中学校）

このことから、若手教員が学習規律の確立を図ることの重要性を意識していることが明らかになった。そこで、学習規律の確立を図るために大切なポイントを3つに絞って示すこととした。

2 学習規律についての3つのポイント

(1) 隼より始めよ

児童生徒にとっての学級は、「安心・安全で楽しい場所」であることが最も大切である。授業中騒がしい、集中できないなどの雰囲気があれば、安心して学ぶことができない。生活習慣と学習習慣、自己肯定感と学力は密接な相関関係があり、学習規律はそれらを高めるためにも必要不可欠である。そこで、児童生徒が安心して学ぶ環境を確保し、学習活動を支障なく進めることができる学習規律が必要である。学習規律は、学級集団の中で自然に確立されていくものではなく、教師の意図的・計画的な指導によって身に付けていくものである。そして、児童生徒の守るべき学習規律は、教師が守るべき指導規律でもある。学習規律を確立させるためには、教師自らが、まず模範を示すことが求められる。

(2) 共通理解、共通実践

学力の向上を図るためには、支え合い高め合う集団づくりを行うとともに、児童生徒が落ち着いた雰囲気の中で学習に集中することができる環境づくりに取り組む必要がある。そのためにも、学習の準備、挨拶、姿勢、発表の仕方、話の聞き方、話し合いの進め方などの学習規律について、児童生徒の状況を全教職員で確認するとともに、現在、各学級や各教科でどのように指導しているのかを共有し、効果的な指導方法を考えていくことが大切である。また、児童生徒への示し方や徹底を図るための方法を確認し、学校全体で根気強く、繰り返し指導を行っていくことも必要である。学校全体で共通理解を図り、全教職員で取り組むとともに、学習規律の役割を児童生徒に理解させることが大切である。

(3) 校種間の共有

小中学校のなめらかな接続は、児童生徒が、落ち着いて学習に取り組むことにつながり、学習効果も上がる。小中連携を進め、学習規律についての情報交換を積極的に図り、同じ視点で児童生徒を見守ることが大切である。

学習規律について

全国学力・学習状況調査においても、学習規律の確立が学力向上に有効であることが明らかになっています。しかし、学習規律は、自然に確立されていくものではありません。教師が意図的・計画的な指導をすることによって、子供たちは身に付けていきます。子供の守るべき学習規律は、教師の守るべき指導規律です。

ポイント1…隼より始めよ

- ① 学級開きを大切にす。
- ② 教師が、子供たちの良好な人間関係をつくる。
- ③ 子供同士の良好な関係を育み、教室を温かい空気に満たす。
- ④ 教室環境を整える。

ポイント2…共通理解、共通実践

学校全体で共通理解を図り、全教職員で取り組むとともに、学習規律の大切さを子供に理解させることが大切です。

- ① 学習の準備、挨拶、姿勢、発表の仕方、話の聞き方、話し合いの進め方などの学習規律について、子供の状況を全教職員で確認する。
- ② 現在、各学級や各教科でどのように指導しているかを共有し、最も効果的な指導方法を考える。
- ③ 学校として必要な学習規律を全教職員で決める。
- ④ 子供への示し方や徹底を図るための方法を決める。
- ⑤ 徹底を図るために、学校全体で根気強く、繰り返し指導を行う。

ポイント3…校種間の共有

中学校区で共通の「学習規律」を共有し、校種間で一貫した指導を行ったり、家庭にも協力をお願いしたりするなど、徹底した意識付けを図ることが大切です。

学習の約束

1. 静かな環境から、学習活動を開始して行く。
2. タイムの合図を守る。
3. 正しい姿勢で学習する。
4. 書きしるす内容をよく読む。
5. 自分の考えを速くで発表する。
6. ノートは、正しい字で書きこんで書く。

学習の約束

1. 授業に必要なものを忘れないう。
2. 授業準備をして、チャイムを待てる。
3. 静かに、静かに授業を受ける。
4. 先生や友達の話をよく聞く。
5. 自分の意見をしっかりと発表する。
6. 学習・発表をする。
7. 机やロッカーは、いつも整理整頓をする。

学習規律と学級経営 (あせび小学校 A教諭)

今年度、教職二年目を迎えましたが、学級全体がまとまらず、授業がうまくいきません。落ち着いた子供も居ません。騒がしい学級で、ついつい大きな声を出して静かにさせながら授業をしています。反響しないし、そのせいで学級の雰囲気はあまりよくありません。隣の学級は、授業中、静かに集中しているし、それが逆にプレッシャーになってしまっています。そんな時、そのことを他の先生に相談すると、「子供たちを信頼して自分の気持ちを子供たちに伝えて、話し合ってみたら」と言われました。そして、子供たちにどんな学級をつくりたいのかを話し、「安心ルール」を子供たちと一緒に決めました。「静かな学級」「話し合いの学級」「机が片付く学級」になりました。静かな学級になりました。そんな子供たちの思いがまとまって、学習規律ができることを私は学びました。

確かな学力の向上を図るためには、学校において、支え合い高め合う集団づくりを行うとともに、子供たちが落ち着いた雰囲気の中で学習に集中することができる環境づくりに取り組むことが必要です。そのためには、学びの基盤となる学習規律を子供たちに身に付けさせることが大切です。

〈図2 学習規律についてのリーフレット〉

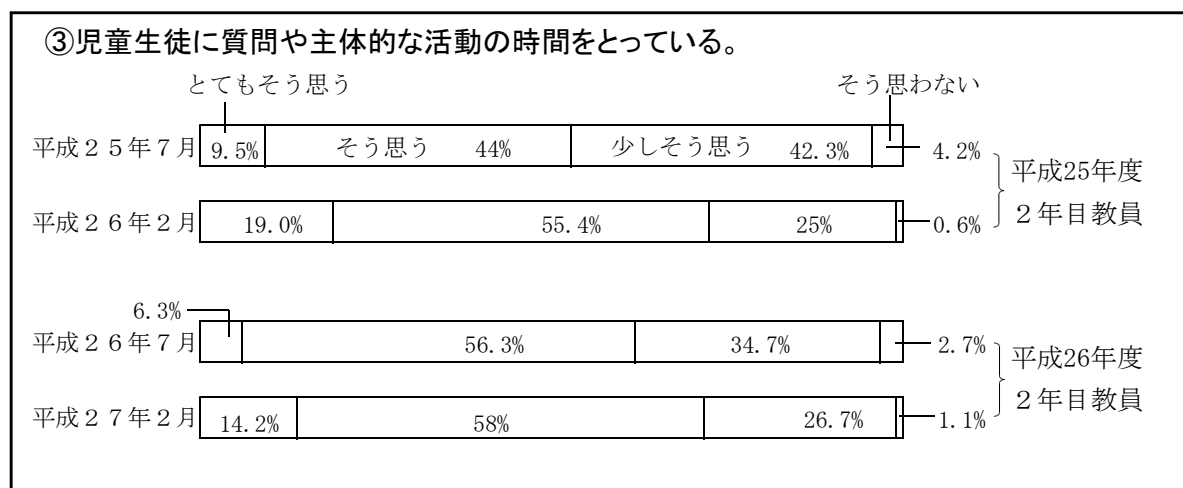
3 主体的に学習する児童・生徒を育てることと学習規律について

確かな学力の向上を図るためには、学校において、支え合い高め合う集団づくりを行うとともに、子供たちが落ち着いた雰囲気の中で学習に集中できる環境づくりに取り組むことが必要である。そのためには、学びの基盤となる学習規律を子供たちに身に付けさせることが大切である。そして、そのような学級の雰囲気の中で、主体的に学ぶ意欲も育つのである。

Ⅳ 学習形態の工夫について

1 授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

学習形態に関わる項目「(③) 児童生徒に質問や主体的な活動の時間をとっている。」については、7月より翌年2月の回答の方が、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加した。また、中でも「とてもそう思う」という回答が、2倍近く増えており、授業実践を積み重ねるにつれて、主体的な活動の時間をとることが大切だと認識している教員が増加したことが分かる。その一方で、平成26年、平成27年ともに、2月の段階でも、「少しそう思う」「そう思わない」と答えた教員が25%～28%存在した。児童生徒の主体的な活動の時間をとることが十分にできていない教員が3割近く存在するということは大きな課題である（図3参照）。



〈図3 「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目③の集計結果〉

また、授業力向上研修実施報告書において、次のような記述が見られた。

- 班活動が十分に機能していなかったので、日頃から目的意識を持った班活動を行い、自分の意見が言えたり、友達の意見をしっかりと聞けたりするように指導する。(中学校)
 - グループ活動などを取り入れ、生徒同士の話し合いによって考察を深める形を実践する。(高校)
 - 班活動をこれからも状況に応じて、適宜取り入れていきたい。生徒たちが共に学び合い、教え合いができる集団づくりを目指して頑張っていく。(中学校)
 - 普段の授業にペア学習やグループ学習を積極的に取り入れる。(小学校)
 - 日頃から学習者一人一人の状況を正確に見取っていきたいと思う。それに併せて、今回はペアでの学習であったが、グループ活動、学級全体など伝え合う場の人数や状況を変えていき、話したり聞いたりする力が確実に育つようにしたい。(小学校)
 - ペア活動だけでなくグループ活動の場も取り入れ、相互評価の時間を取り入れることも必要であると感じる。グループ活動は、自己表現に自信がない児童も無理なく発表できるという点でも有効ではないかと考える。どの児童も楽しんで取り組めるような場づくりをしていきたい。(小学校)
- このように、報告書から、学習形態の工夫を行うことが学習活動を円滑に進め、学習効果を上げることにつながることを教員が理解しながらも、実践方法に苦慮していることが分かってきた。
- そこで、学習形態の工夫については、「学習目標にあった学習形態」「事前・活動中・事後における教師の支援」という2つのポイントにまとめた。

2 学習形態の工夫についての2つのポイント

(1) 学習目標にあった学習形態

学習者が課題の発見、解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）を効果的に行うための指導方法として、学習形態の工夫は大切である。

児童生徒にどんな力を付けるのか、1時間の目標を明確にし、その目標を達成するための学習活動としてふさわしい学習形態をとることが学習効果を高める。例えば、クラスで一つの案を生徒会に提案する場合、話し合う目的は互いの意見を一つにまとめることになる。また、読書の感想の交流であれば、互いの感想から共通点や相違点などを学ぶことが目的になる。学習形態には、ペア型、グループ型、コの字型などがあるが、どの形態を選択するのが効果的かを事前に十分考えておくことが求められる。

(2) 事前・活動中・事後における教師の支援

学習形態を変化させるときには、必ず事前指導で活動内容やねらいを明確に指示をすることが大事である。また、学習活動時には、集団のそれぞれを観察し、適宜アドバイスを行うことが必要であるとともに、参加できない児童生徒への配慮も考えなければならない。

〈実践例〉

① ペア・グループ学習の場合

まず自分の考えをノートにまとめ次に互いの考えを比較し、最後に話し合いの前後で自分の考えがどう変化したかを書く。

② ホワイトボードでグループ学習

意見を出し合った後、提案する形にまとめていき、全体に提示しながら発表する。

③ ミニホワイトボードで学習

フリップとして使ったり、交流の場面で自分の考えを書いたボードを掲げたりする。

④ ジグソー学習法でグループ学習

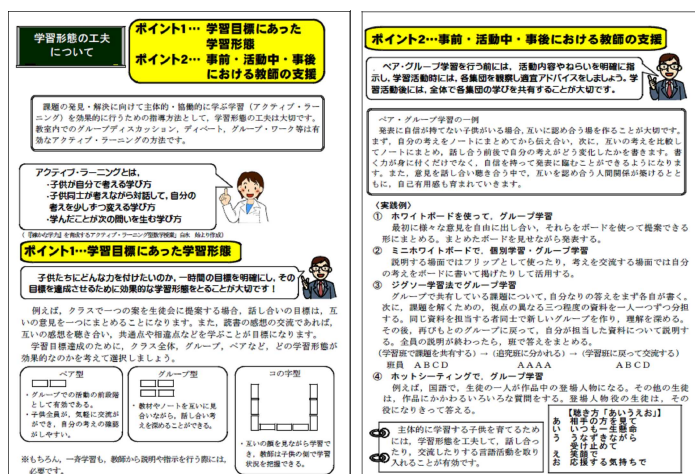
グループで共有する課題について、自分なりの答えをまず書く。次に、課題を解くため視点の異なる3つ程度の資料を一人一つずつ分担し、同じ資料を担当する者同士で新しいグループをつくり理解を深める。その後、再びもとのグループに戻り自分が担当した資料について説明する。全員の説明が終わったら、班で答えをまとめる。

⑤ ホットシーティング

例えば、生徒の一人が作品中の登場人物になり、登場人物役は、その役になりきり、皆からの質問に答える。

3 主体的に学習する児童・生徒を育てることと学習形態について

主体的に学習する児童・生徒を育てるためには、授業において学習形態の工夫を行い、一人一人が自分の考えを発表したり、班で話し合ったり、全体で交流したりする言語活動を取り入れることが有効である。

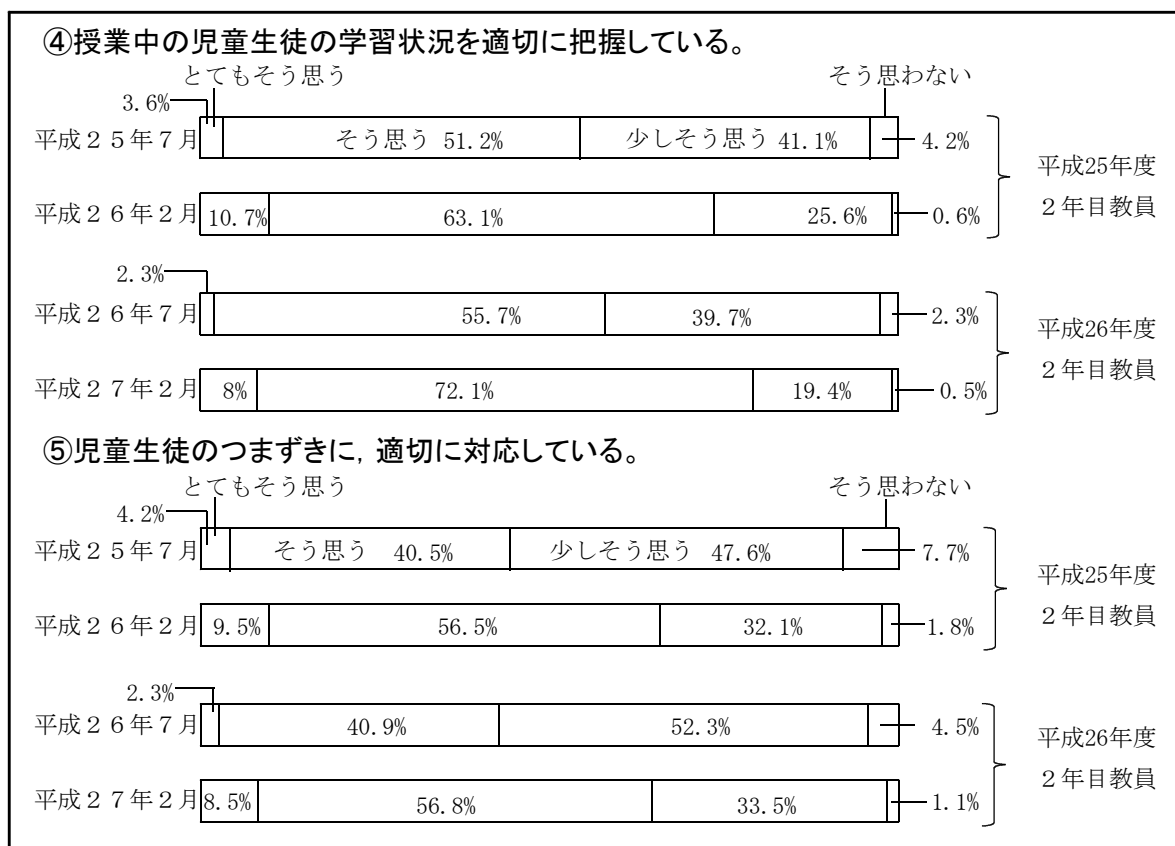


〈図4 学習形態への工夫についてのリーフレット〉

V 進捗・学力差への対応について

1 授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

進捗・学力差への対応に関わる2つの項目「④授業中の児童生徒の学習状況を適切に把握している。」「⑤児童生徒のつまずきに、適切に対応している。」について、いずれの項目も、7月より2月の回答の方が、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加している。経験を積むにつれて、児童生徒の状況をつかめていると感じていることが分かる。しかし、2月の回答においてもなお20～30%前後の教員が、「少しそう思う」「そう思わない」と回答しており、課題も見られた。この2項目は、7月の段階から「少しそう思う」「そう思わない」と答える割合が高く、難しさを感じている若手教員が多かった。これらの傾向は、平成25年・26年度の両年度に共通している。



〈図5 「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目④⑤の集計結果〉

また、若手教員の授業力向上研修実施報告書には、次のような意見も見られた。

- 実態把握をもとに、つまずくポイントを予想し、解決に導けるような教材を用いる。適切な児童の実態把握と実態に合った教材の研究を改善のテーマとして取り組みたい。(小学校)
- 授業に参加できていない生徒への声かけやフォローが少ないとの指摘をいただいた。全体が見えるように心がけて授業を行いたい。(高校)
- ティームティーチングの先生に、自分で把握しきれていない生徒のつまずきなどの学習状況を聞いて、自分にフィードバックして授業改善に努めていきたい。(特別支援学校)

このように、若手教員が、進捗・学力差への対応が難しいと考えている現状から、進捗・学力差の対応について、「ころばぬ先の杖」「つまずき予想」「個別指導」の3つのポイントにまとめた。

2 進捗・学力差への対応についての3つのポイント

(1) ころばぬ先の杖

学習のねらい（目標）を明確にし、見通しを持って学べるようにしたり、児童生徒の実態をよく把握し、校種・学年・教科の特性に応じたよりよい問題提示をしたりすることは大切である。児童生徒の進捗・学力差への対応については、個別指導の在り方をまず想起しがちだが、個別指導に至るまでに、上記のようなことを準備しておくことが必要である。

(2) つまずき予想

児童生徒のつまずきに適切に対処するためにも、教材研究は重要である。本時に予想されるつまずきの解決方法をあらかじめ想定し、個別指導か全体指導かを見極める。なお、個人差があるからといって、最初から考え方を教え込むと児童生徒自身に考える力が身に付かない。考えさせることと教えることを見極めた上で支援をする。その判断も教材研究にかかっている。

(3) 個別指導

① 机間指導で行うこと

もし、多くの児童生徒が問題の把握をできていないのであれば、全体の活動を止めて問題の再提示を行う。

② ヒントカードの用い方

自力解決が困難な児童生徒に対し、教科書をヒントカードとして使う方法がある。教科書を開けて、一緒に確認すると理解が進む。

③ つまずいている子も進んでいる子も共に

課題が早く終わった児童生徒のために、次の課題を用意する。ともすれば、個人差への対応は、つまずいている児童生徒に向けられがちだが、進んでいる児童生徒への対応も大切である。進んでいる児童生徒に考え方を説明することを求めるのもよい。

④ 量的に与えるから質的に与えるへ

学習プリントを用いる際には、量と質の両面から考えるようにする。プリントを次々と解かせる方法は、課題を量の面から与えたことになる。一方、3分以内でできるプリントでも、あえて3分間を保障し、絶対に誤りがないように何度も見直しをさせるといった質の面から課題を与える方法もある。

進捗・学力差への対応について

ポイント1…ころばぬ先の杖
ポイント2…つまずき予想
ポイント3…個別指導

進捗・学力差と関わり、個別指導を進めようとしても、もちろんそれは大切なことです。しかし、まずは、個別指導を行うまでに、課題提示の工夫や教材研究など、しておかなければならない準備があります。

子供たちに本時の課題をわかりやすく提示することがスタートです。課題の把握が不十分では、自力で解決することも容易ではありません。

ポイント1…ころばぬ先の杖

① 学習の実態に応じた課題提示
 評価基準を考えると、学年の実態を知ることが大事です。同様に、課題の提示も目の前の子供たちの実態に即して行う必要があります。校種・学年・教科によって工夫が必要です。

② わかりやすい課題提示
 ICT機器を活用して興味・関心を引き起こしたり、課題とねらいを板書してノートに視写（書き写し）させたりするなど、導入の工夫をすることが大事です。

ポイント2…つまずき予想

① 個別指導を適切に行うためには重要
 子供がどの部分につまずいているかを適切に把握するためにも、教材研究は重要です。本時に予想されるつまずき箇所とその解決方法を予め把握しておく、個別指導での子供たちの考え方の見取りが早くなります。

② 考えさせたいことと教えなければならないこと
 はじめから教え込んでしまうと考える力が身に付きません。しかし、自力で解決できないとなると、しっかり支援をして教えなければなりません。その見極めも教材研究にかかっています。

ポイント3…個別指導

① 机間指導で最初に行うこと
 机間指導では、まず、皆が課題を把握できているかどうかを確認します。把握が不十分な子供に、一人に1分かけて説明をするとなると、五人で5分を必要とします。多くの子供たちが課題を把握できていないなら、全体の活動を止めて課題の再提示をします。

② ヒントカードの用い方
 自力解決が困難な子供に、解き方のヒントを記したヒントカードを配る方法があります。しかし、毎時間、カードの準備をするのは大変です。そこで、教科書をヒントカードとして使う方法があります。通常は閉じている教科書の該当ページを開けて、いっしょに確認すると理解が進みます。

③ つまずいている子も進んでいる子も共に
 課題が早く終わった子供のために、次の課題を用意しましょう。ともすれば、個人差への対応は、つまずいている子供に向けられがちですが、進んでいる子供への対応も大切です。進んでいる子供に、みんなの前で自分の考え方を説明させるのもよいでしょう。

④ 量的に与えるから質的に与えるへ
 学習プリントを用いる際には、量と質の両面から考えます。プリントが1枚で済めば次の1枚へと進ませる方法は、課題を量的に与えたことになりません。一方、3分以内でできるプリントでも、あえて3分間を確保し、絶対に誤りがないように何度も見直しをさせるといった質的に課題を与える方法もあります。方法を使い分けましょう。

「教えるべきは教え、頼るべきは頼れ、正すべきは正す」ことが大事です。本時に身に付けなければならないことが不十分な子供には、時をおかず教えることが必要です。

〈図6 進捗・学力差への対応についてのリーフレット〉

3 主体的に学習する児童生徒を育てることと、進捗・学力差への対応について

主体的に問題を解決する児童生徒を育てるためにも、授業中の学習状況を把握し、個々のつまずきに適切に対応することが求められる。児童生徒自身が、自ら考え、気付き、分かったと実感できることで、知識は真に定着する。個別指導といっても教師が一方的に教えるのではなく、自ら分かったと思えるような指導を心がけて、児童生徒の自信と次への意欲を育てるようにする。

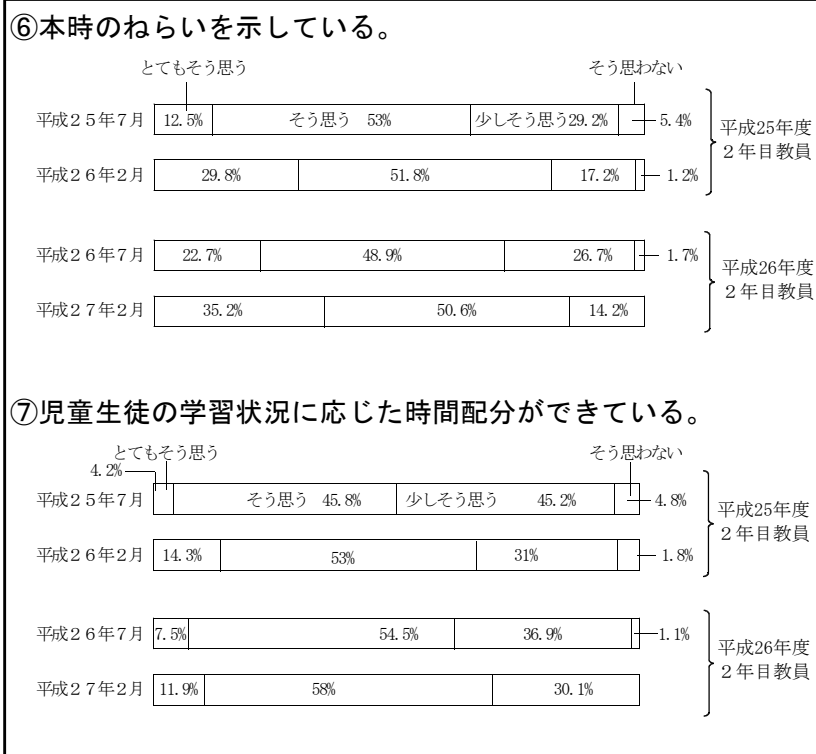
VI 学習の見通し・振り返りについて

1 授業点検シート・授業振り返りシートの分析から

学習の見通し・振り返りに関わる2つの項目「⑥本時のねらいを示している。」「⑦児童生徒の学習状況に応じた時間配分ができています。」について、いずれの項目も、7月より2月の回答の方が、「とてもそう思う」「そう思う」の回答の合計が増加している（図7参照）。若手教員が、児童生徒に「見通し」を持たせたり、「時間配分」の重要性を認識したりするようになったことが窺える。

また、学習指導要領には、総則編にある指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として、

「各教科等の指導に当たっては、児童(中学校は生徒)が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること(中学校は「取り入れるようにすること」)」が示されている。また、全国学力・学習状況調査においても「見通し・振り返り学習」を積極的に行った学校ほど記述式問題(活用に関して問うB問題)の正答率が高い傾向にあることが報告されている。そこで、学習の見通し・振り返りについて「見通し」「振り返り」の2つのポイントにまとめた。



〈図7「授業点検シート」「授業振り返りシート」質問項目⑥⑦の集計結果〉

2 学習の見通し・振り返りについてのポイント

「見通す・振り返る」学習活動は、日々の授業展開の中で当然行われなければならないことである。しかし、上記のアンケートでは、現実には十分できていないことが窺える。児童生徒自身が、その授業において「何を学ぶのか」「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶのか」を理解し、結果として授業で「何を学んだのか」「どのような意味があるのか」を実感できるようになっているかが大切である。そのためには、学年・単元又は学習のまとめり・毎時間等の中で指導者の立場での「見通し・振り返り」に加え、学習者の立場での「見通し・振り返り」も明確に捉えておく必要がある。

(1)「見通し」のポイント

① 目標分析

学習指導要領や各学校で付けたい資質・能力等から目標を明確にすることが大切である。そして、「教えたこと」を「学びたいこと」に変える工夫をする必要がある。

② 何を・なぜ学ぶのか

単元や授業を通した課題意識を持たせたり、児童生徒自身から疑問が生まれる工夫をする。

③ どのように学ぶのか

学習の流れを提示したり、モデルを提示したりする。

④ 導入の工夫

前時の振り返りを活用し、目標は分かりやすい具体的な文言で示す。

(2)「振り返り」のポイント

① 自己評価

分かったことなどを自分の言葉で記述させたり、「分かったこと・できたこと」だけでなく、「よく分からなかったこと」や「もっと調べたいこと」なども書くようにすることも大切である。また、記述内容の質を高めるためには、教師からの評価と指導が重要である。

② 「見通し」と対に

「見通し」と「振り返り」がつながるように、振り返る視点を児童生徒に示したり、振り返りの時間をしっかり確保したりすることが大切である（めあてに合ったまとめにする）。

③ 板書・ノートの工夫

めあてや思考の過程等が見える板書を行ったり、丁寧なノート指導を行ったりすることで、振り返りが充実する。

④ 内容を吟味し、指導改善に生かす

児童生徒の振り返りを吟味することで、教師自身の指導を振り返り、次の指導に生かすことができる（PDCAで次時へつなぐ）。

3 主体的に学習する児童生徒を育てることと「見通し・振り返り」学習活動について

「見通し・振り返り」学習活動と言語活動を適切に組み合わせることで、主体的に学習する児童生徒を育てる学習指導が展開される。

授業の導入段階で、児童生徒に学習の見通しを確実に持たせ、展開段階で、めあてに沿って一人一人に自分で考えさせ（自力解決）、自分の考えをもとに、話し合い（練り上げ）をさせていく。つまり、児童生徒自身が、筋道を立てて考え話し合ったり、実験のレポートを論述したりした後、まとめの段階で、学習活動や学習内容を振り返ることである。この学習活動が確実にできれば、児童生徒は毎時間の主体的な学びを深めることができる。と考える。

また、「見通し・振り返り」における言語活動は、「話す・書く」という表現行為であり、見通しが振り返りの質を高め、充実した振り返りが次の活動への見通しを持たせることにつながっていく。

したがって、「見通し・振り返り」活動の充実、主体的に学習する児童生徒を育てる上で重要な役割を果たす活動であると考える。

〈図8 学習の見通し・振り返りについてのリーフレット〉

Ⅶ 研究の成果と課題

平成25年・26年度の教職2年目の教員を対象に「授業点検シート」「授業振り返りシート」を用いた振り返りを行い、経験年数の浅い若手教員が抱えている授業づくりへの課題を収集した。1年次の取組^{*1}に加え、平成27年度は、児童生徒が「主体的に学習するための方策」について扱うこととし、「学習規律」「学習形態の工夫」「進捗・学力差への対応」「学習の見通し・振り返り」の4項目について「とくしま授業技術の基礎・基本2」^{*2}にまとめた。これは、総合教育センターで行う基本研修（初任者研修、授業力向上研修、教職5年次研修、10年経験者研修）で研修資料として用いたり、校内研修等で活用したりすることを想定しており、本センターのWebページにも掲載している。

また、授業力向上研修受講者を対象に1年次に作成した「とくしま授業技術の基礎・基本」^{*3}の活用状況についてアンケート調査（図9参照）を実施し、冊子の改善点や研究の3年次に向けた課題を知る機会とした。本研究は3年間の継続研究であり、調査結果と改善点や課題については、3年次の研究で明らかにしていく予定である。これらの取組が若手教員の授業力向上に寄与するよう研究を続けていきたい。

授業力向上研修受講の皆様へ このアンケート調査は、授業力向上研修を受講する先生方を対象に、研修で使った「とくしま授業技術の基礎・基本」の活用状況を把握するとともに、授業の事前準備や授業後の評価等における不安や悩みを調査することによって、今後の研修内容に生かしていくことを目的とするものです。 *所属校種に○を付けてください。 <table border="1"> <tr> <td>所屬校種等</td> <td>小</td> <td>中</td> <td>高</td> <td>特</td> <td>養</td> </tr> </table> *Q1～7の質問項目について、当てはまる回答選択肢の【 】に○を付けてください。また、その他については具体的に記述してください。 Q1 「とくしま授業技術の基礎・基本」は、活用しましたか。 ①とても活用した【 】 ②少し活用した【 】 ③あまり活用していない【 】 ④活用していない【 】 Q2 Q1で①・②と回答した方に質問します。 「とくしま授業技術の基礎・基本」は、役立ちましたか。 ①とても役立った【 】 ②少し役立った【 】 ③あまり役立っていない【 】 ④役立っていない【 】 ⑤その他【 】 Q3 Q2で①・②と回答した方に質問します。その理由を選んでください。（※複数回答可） ア 授業改善に役立った【 】 イ 児童生徒の学習意欲の喚起が図られた【 】 ウ 校内研修等で役立った【 】 エ その他【 】 Q4 Q2で③・④と回答した方に質問します。その理由を記述してください。 理由【 】 Q5 Q1で③・④と回答した方に質問します。その理由を記述してください。 理由【 】 【裏面に続きます】	所屬校種等	小	中	高	特	養	Q6 「とくしま授業技術の基礎・基本」について、内容や構成、活用方法等について改善への意見があれば記述してください。 【 】 Q7 授業の事前準備（授業構想等）や授業後の事後指導等を行っていく中での、不安や悩みについて質問します。 次の①～⑤のどの項目に、不安や悩みがありますか。当てはまる回答選択肢の【 】に○を付けてください。（※複数回答可）また、回答した項目について、具体的に記述してください。 ①教材研究（例：教材・教具・ワークシートの作成など）【 】 （具体的に）【 】 ②学習指導案の作成【 】 （具体的に）【 】 ③学習評価（例：評価基準・評価方法など）【 】 （具体的に）【 】 ④児童・生徒理解と学習指導（例：学習への意欲づけ・授業後の指導・家庭学習指導など）【 】 （具体的に）【 】 ⑤その他【 】 （具体的に）【 】
所屬校種等	小	中	高	特	養		

〈図9 活用状況のアンケート〉

*1 徳島県立総合教育センター『研究紀要第94集』，2014年，1～10頁
（<http://www.tokushima-ec.ed.jp/研究紀要/>）。

*2 徳島県立総合教育センター「とくしま授業技術の基礎・基本2」，2015年，
（<http://www.tokushima-ec.ed.jp/教職員支援/学力向上関係資料/>）。

*3 徳島県立総合教育センター「とくしま授業技術の基礎・基本」，2014年，（同上）。

参考文献

- ・徳島県教育委員会「平成27年度初任者研修のしおり」，2015年
- ・徳島県教育委員会「平成27年度授業力向上研修の手引」，2015年